

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2016年度 助成者)

作成日 2016年11月8日

氏名 (フリガナ)	藤澤 知枝美 (フジサワ チエミ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2016年10月9日 (日) ~ 10月15日 (土)
所属機関名	総合病院聖隷浜松病院
身分	看護師

初めて海外の病院に足を踏み入れたのだが、驚くことが多かった。まず、ロビーが高級ホテルのように綺麗なのだ。ここは本当に病院なのか、目を疑った。また、自然治癒力を増すという意味合いも込めて、院内に緑がたくさんありとても素敵な空間だった。

子ども病院では、処置室の壁やカーテンにその地域にある乗り物や建物の絵が描かれており、処置をしながら注意を他に向けられるような明るい雰囲気作りになっていた。階数毎異なった動物が決まっており、エレベータを降りると絵を頼りに病棟に行くことができる。外来も科毎にイラストがあり、外来フロアは水族館のような作りだった。

この子ども病院で印象的だったのは、廊下に描かれた3つの絵。3つの絵には「あなたの力の源は何?」「困難に立ち向かう君を助けてくれるのは誰?」「これまでで何に一番勇敢に立ち向かった?」という言葉が添えられていた。可愛らしい絵の中のその言葉が、自分にも問いかけてられているような気がして少しドキリとした。

多くの病院の各病棟には看護の質の改善に関する掲示があり、自分たちが行っている看護の可視化(感染についてなど)がされ、その結果についてスタッフも誇りに思っているという。アメリカでは看護学生の頃から専門とする領域を決め、ほとんどの人がスペシャリストとして働いている。経験を生かし専門の領域でずっと働くのだ。いろいろな領域で働きたいと考えている私は、いささか窮屈に感じた。訴訟の多いアメリカでは記録も確実に行っており、時々記録が抜けてしまうことがある私はその緊迫感を見習わなければならないと感じた。

驚いた事は、産休中に修士を取得した人もいてスタッフの向上心とそれを金銭的にバックアップする病院(修士・博士などへの進学費用は病院が全て負担してくれるという)の体制は、より知識を持ったスタッフが増えることで病院内のスタッフの質の向上につながりひいては病院自体の質の向上、患者満足度が高くなる評価につながる。そのようなよいサイクルができています。日本では人手不足から休日が減り、体調を崩すという負のサイクルの話は聞かれますが、アメリカのサイクルはとても理想的で感心しました。同時にどうすればそこまでもっていけるか疑問に思う。

「看護師」は社会的にステータスがあり、個々人の能力によって報酬も変わってくる。土日出勤の手当もあるし、頑張れば頑張った分だけ賃金という目に見える形で自分に返ってくる。いろいろとシステムは違って羨ましいと思う反面、今の日本の診療報酬制では病院の収入が決められている為、無理だと諦めたりもする。今の日本の国民皆保険を保ちながらアメリカのようになればベストだと思うが、それには看護協会が強くなったり、自分たち自身も何か社会的な行動を行ったりしていかなければいけないのかもしれないと感じた。

日本に帰ってきて感じたことは、アメリカはやはりハード面において魅力的ですごいと思うが、システムは違っていても患者の意思に寄り添った看護など行っている看護自体は大きな変わりはなく、むしろアメリカでは「あの患者さんは気難しいから受け持ちたくない」などとはっきり言うという。アメリカより日本の方がきめ細かい心遣いがあると現地で働いている日本人ナースが話しており、自分たちが行っている看護には自信を持っていいと思った。

今回様々な立場の人とこの研修を通して知り合えたことで、20代の若い人も高い意識・志を持って研修に参加しており、自分ももっとできることを頑張らなければならないと感じたのとチャレンジすることを恐れてはいけなくて刺激を受けた。またどこかで会える日を励みに、気持ちを新たに日々頑張っていきたいと思った。